

幻の「ロボット技術展」(前編)

宮原 豊 (9組)

【ロンドンっ子たちの目の色が変わった】

今から 28 年前の 1991 年 (平成 3 年)、The Japan Society (日英協会) 創立 100 周年を記念する「ジャパン・フェスティバル」の併催事業として、Science Museum (英国国立科学博物館) で開催された Robotics Japan (ロボット技術展)の開会式の模様である。日英両国の皇太子殿下がご臨席され、英国政財界の賓客を招いての華やかな開会式であった。

日本のロボット技術を過去・現在・未来にわたって展開した。過去は江戸末期のカラクリ人形 (茶運び) の実演、現在ゾーンでは、産業ロボット工業会傘下の企業による現役ロボットを改造しての似顔絵ロボット、色や形でブロックを分類し並べ直すロボット、独楽芸ロボットなど、当時の最先端技術のパフォーマンスでロンドンっ子たちを驚かせた。更に未来ゾーンでは試作・開発中の壁登りムカデロボット、火中や危険地帯で行動するロボット、光や熱センサーを使った AI ロボットの実演を約 1 ヶ月半にわたり展開した。



日英両国皇太子殿下がご臨席

開会式でスピーチされる増田理事長

例えば 30 年前、ロンドンっ子のために開催したこのロボット展は「その頃の日本の子供達のためにこそ実施されるべきものであった」と思う。AI の分野で日本は既に世界をリードしていた。両国の最先端研究者・技術者が出席した日英産業協カシンポジウムでは、日本側の発表者が明らかに討論をリードしていた。噂を聞きつけたホーキング博士もロボット展の会場を訪れた。数年後に Science Museum は「ロボット技術展」をまた開催してほしいとジェットロに申し入れてきたが、あのような展示会を実施することは困難だと断ったと聞く。



ホーキング博士

【そもそも音楽ロボットの演奏で十分だったのに】

当時の日英協会理事長ヒュー・コータツツィ氏（元駐日英国大使）から、ジャパン・フェスティバルの併催事業として「音楽ロボットを演奏したらどうか」という提案があり、それが発端であったと言われる。1985年つくば万博で早稲田大学が開発したロボットが電子オルガンを見事に演奏して人々を驚かせたが、コータツツィ氏はいつの頃か銀座の街角で音楽ロボットを見たと言う。日本は楽器演奏ロボットの研究に熱心で、その後2005年の愛知万博ではもっと複雑で高性能な音楽ロボットが登場したことが知られている。

最初、音楽ロボットをロンドンっ子に見せたいという話が、日本のロボット技術の展示・実演が英側から要望されていると外務省は通産省を經由してジェットロに協力を求め、それを真に受けたジェットロは産業ロボット工業会に持ち掛けた。そして、受ける以上は日本の産業界として総力を挙げてやろう、産業ロボットの最新技術や工業技術院で開発中の未来ロボットを紹介しようとの企画は格上げされた。

そんな中を、私はジェットロの総括責任者（会計担当）に任命された。この事業が動き始めて約3年間、幾多の苦難に見舞われながらも、英知を結集してチームとして立派な仕事ができることに誇りを感じている。それが何故に幻の「ロボット技術展」なのか？

（後編に続く） （2019年5月8日記）